



# 雲晴

新年号

「雲

晴」

第四十九号

令和六年一月一日発行

貞林院 瑞正寺

〒125-0041 東京都葛飾区東金町五丁目四六-五  
電話 (03) 362-2713 341-5  
FAX (03) 569-9159 91-5

ついでに  
新年のお慶びと  
申しあげます

今年辰年、前回の甲辰は昭和三十九年、東京オリンピックの年でした。東海道新幹線や東京モノレールの開通など、正に世界に戦後の日本の成長を見せつけるような時代でした。世の中はオリンピック景気に浮かれ、高度成長の集大成ここにありという感じだったと思います。

あれから六十年、今の日本はあのころの勢いがどこに行ってしまったかのようです。

円安に物価高、世界でも日本の競争力はどんどん衰えています。また四年前の世界中に拡がった新型コロナウイルスに始まり、ロシアによるウクライナ侵略、そしてまたイスラエルとパレス



チナとの紛争により政治も経済も不安定な状況が依然続いています。

辰年は龍のその姿や勢いに例えられ、景気が良くなるか成長の年などとよく言われます。どうか今年からは世の中が明るい希望の年となることを願いたいものです。

さて本年は法然上人が承安五年(一一七五年)に浄土宗をお開きになってから八五〇年を迎えます。この寺報では以前に「法然上人の御生涯」という題で連載をしておりますので、これまでの寺報をお持ちの方は令和二年の春彼岸号とお盆号を是非読み返してみてください。

法然上人がどのような思いで修行をされ、どんなことから「念仏こそが煩惱に迷い、来世に不安を持つ人々を救える道である」という確信を得たのかがお分かりになると思います。

開宗八五〇年を迎え浄土宗ではこの良き勝縁に当たり、様々な慶讃事業を昨年より行っております。本年は正當となりまして東京教区主催の開宗八五〇慶讃法要を二月二十三日、また毎年行われる御忌大会は、四月二日から九日まで御忌法要に加え慶讃法要がそれぞれ大本山増上寺にて行われます。

五十年に一度という大変に有難いご縁でもありますので是非お出かけいただき、法然上人が浄土宗をお開きになったお気持ちを感じていただき、よりお念仏のご信心を深めていただければ幸いです。



# 唱歌のふるさと 童謡のくに ⑬

著：佐山哲郎



友とか語らん

鈴懸の径

という出だしの歌である。

この歌はダークダックスが歌

つてヒットしたので戦後の歌と

思われがちだが実は昭和十七年

の歌なのである。

大陸に戦火が拡大し戦争は泥

沼化の様相を呈する中で、若者

はこのような叙情歌を歌つてい

たのである。

最初に歌つたのは灰田勝彦、

作曲はその兄、灰田晴彦で作詞

は佐伯孝夫であった。

戦後は男性四部のアレンジで

ダークダックスがよく歌った。

この四人、慶応のワグネルッサ

エテイ出身である。

ダークダックスは最初三人で

始まった。昭和二十五年ワグネ

ルスエテイのクリスマスマスパー

テイで喜早、佐々木、東山、の

三人がジングルベルやホワイト

クリスマスをやったつて喝采を浴

びた。その後新入生の高見沢を

補強。ジャズコーラスのアルバ

イトとして米軍のクラブや、学

生のパーティなどで稼いだ。

二十九年、デイズニー映画の

わんわん物語の日本語吹き替え

の時に音楽担当の三木鶏郎に抜

擢され、タイトルバックの歌を

歌ったのが世に出るきっかけと

なった。

専門のコーラスグループとし

てはデビューは三十年。三万

人の組合員を持つ大阪労音での

リサイタルで三日間会場を満員

にしたことで自信をつけプロと

なる決意をした。

喝采

# 華

花はらひて  
實をむすぶ  
好胤



## ⑤手袋を買いに

高田都耶子

四国高松の祥福寺というお寺から毎月心待ちの葉書が届きます。月々の門前の掲示板の言葉を葉書で届けて下さるのです。例えば

余計な言葉など要らなかつた。  
握り締めてくれた温もりだけで

歌人 鹿目三郎

と方丈さんの優しい筆文字で言葉が書かれていて、続いて解説が綴られています。

「昭和二十九年から六十年近く、小学校三年生の国語の教科書に掲載されていた新美南吉の「手袋を買いに」という童話をご存知でしょうか？」

寒い冬の夜、手袋を買いに人間の街

に行く小狐と、小狐だけで行かせた母

狐の心情を描いたお話です。今月の言

葉を選びながら、この童話の中のある

定慧を思い出しました。それは、雪を

初めて見た小狐が雪遊びをして、すっ

やさしく息を吹きかけながら温かい手でやんわりと包んであげるシーンです。幼い頃お父さんやお母さんと手を繋いで歩いたこと。そんな思い出はありませんか。今はもうその手の温もりに触れるのができない人もいますでしょう。思い出したいときは、お仏壇の前で手を合わせて下さい。大切な人の手の温もりは、あなたの手の中に「読み終えて目頭が熱くなり、ふと幼い頃の光景が思い出されました。」

# 一口法話



「極楽も かくやあるらん」

法然上人は、御年七十五歳の時、お弟子の罪咎を背負われ、流罪の身の上となられ、讃岐の国、今の香川県へ赴かれました。京都を立ち、十日後、讃岐の塩飽島に到着され、その土地の地頭、高階入堂西忍の御屋敷にお世話になることになりました。高階入堂は、前日の夜、十五夜の月がキラキラと輝きながら、自分の衣の袖に入る夢を見て、不思議だと思っていたところ、京都からあの法然上人が、自分たちの島にお越しになられた。きっとこのことをお告げ下さったものだと思われ、薬湯を準備し上人の寒さと疲れを癒し、村人たちが心からのご供養をささげたのでした。法然上人は有難さのあまり、その喜びの心を「極楽もかくやあるらん あらまし はや参らばや 南



# 誘いの書へ



龍

貞林院瑞正寺 住職 林 清方

この「書への誘い」は平成二十六年正月号より掲載が始まり

私の父は来る日も来る日も、薬師寺を訪れてくれる修学旅行の生徒さんたちにお寺の説明を縦糸に、法話を横糸に織り込んで一生懸命に「仏こころの種まき」をしている毎日でした。或る日早く帰って来た父は、幼い私をおぶって唐招提寺までの一本道を歩いてくれました。色々な話をしてくれ、覚えている話は、桐の木が何本も植えてある所を通った時でした。ふと父が「女の子が生まれたら桐の木を植えてな、お嫁に行く時に筆筒を作って花嫁道具に持たせるんや」と教えてくれて、続けて「そしてこれはな、都耶子がお嫁に行く時のための桐なんや」と。そんな父の言葉を聞いて、この木はいつ筆筒になるのだろうとぼんやり思ったことでした。そのとき父娘を包む時間



はゆつくり流れ、桐の林も父も私も大きな夕日に照らされて蜜柑色に染まっ

早いもので九十年、第四十一年目を迎えました。錦洞没後十五年となりませんが、こうして先代の作品を紹介できる事を有難く思います。連載十年を迎えあらためて林錦洞の紹介をさせて頂きます。当山第二十五世で林祖洞（現住職の母方の祖父）を師として書の道に入り、その後僧侶と書家として活動してきました。現在の産経国際書会の創設にも関わり、初代理事長の任に就いております。この書会は昨

ていました。思えばこれこそが私の故郷の原風景です。  
時は流れて、あの日のことを思い出しながら「小さいときにお父ちやまの背中におんぶされて歩いてもらったあの時、これはお前の筆筒を作る桐の木やと言っただけでしたが、あの桐畑は今はどうなりましたか」と尋ねました。父はキョトンとして「そんなこと言うたか・・・知らんなあ・・・」と答えましたが、あれはきつと、娘に桐ダンスの一棹も持たせてやりたいと言っと思いを語ってくれたのでしよう。  
そしてまた何十年も経ち、今はもうその桐畑も無くなってしまいました。あの日の大きな夕日の中の思い出は今も色褪せず土道の匂い共に蘇ってくるのです。

年八月に設立四十周年を迎え、東京都美術館にて盛大に記念展が開催されました。また浄土宗芸術家協会の理事長としても宗内の芸術活動促進に努めておりました。これからも作品を通して先代の書に対する魂の一端に触れて頂ければ幸いです。  
さてこの作品は今年の干支であります「龍」ですが、法然上人の伝記にも龍にまつわるこのような話があります。現在の静岡県御前崎市には「桜ヶ池」と

無阿弥陀仏」（皆様の心からのおもてなし。誠に極楽に来たような、心なごみ、嬉しい気持ちでいっぱいです。まさしくこのようなお浄土へ益々参りたく思います。南無阿弥陀仏。）とお詠みになりました。  
人様の優しき、心づかいのあたたかさ、或は美しい風景に接した時、この世においてさえこのようであるならば、阿弥陀さまのお浄土はどれほどあたたかく、美しく、喜びに満ち溢れているのだろうか。そう想いを馳せてみると、ますます極楽が慕わしく、力強いお念仏が申せるのではないのでしょうか。  
(総本山知恩院布教師会ホームページより)

いう池があり、法然上人が比叡山で師とした名僧皇阿闍梨は、衆生救済のため自らこの池に沈み龍に化け、池の主神となりました。数年後に法然上人が弟子と共にこの池を訪れ、師への供養として赤飯をお櫃に詰め阿弥陀経を唱えながらこれを池に沈めたところ、池から阿闍梨が姿を現したというものです。以来八百五十年「桜ヶ池お櫃納め」という奇祭が現在まで続いております。





### 謹賀新年

寺内一同、おかげさまで元気に年を越すことができました。今年も心を新たに精進いたしますので、檀信徒の皆様におかれましては、今後とも寺の護持興隆にご協力を賜りますようお願い申し上げます。辰年の守り本尊は、普賢菩薩です。文殊菩薩と共に釈迦如来の脇侍として隣におられます。六波羅蜜（菩薩が修行すべき六種類の行）のうち、心の安定すなわち禅定をつかさどる仏とされておられ、私たちに最も優れた善を説く菩薩と言われているとされています。

普賢菩薩さまのご加護により、今年一年皆さまが善行に励み、その功德として平穩無事に過ごされることを心より祈念申し上げます。

令和六年辰甲 元旦

#### 貞林院瑞正寺

住 職 林 清方  
副住職 林 良政  
法類総代 林 英道  
同寺総代世話人一同

### 令和六年 年中行事のお知らせ

本年の行事につきましては、下記のとおり予定しております。近づきましたらあらためてご案内いたしますので、お誘い合わせの上ご参詣ください。

\*春・秋彼岸会法要につきましては、寺報にてご案内をしております。お中日に塔婆回向をしておりますので、塔

婆をご希望の方は電話・ファックス、メール等によりお申し込みください。			
*春彼岸会法要	三月 二十日(金)		
施餓鬼会法要	五月 十四日(火)		
七月お盆法要	七月 十四日(日)		
八月お盆法要	八月 十三日(火)		
*秋彼岸会法要	九月二十二日(日)		

### ハワイマウイ島ラハイナ浄土院 復興支援金のお礼とご報告

昨年の寺報秋彼岸号の送付に併せ、山火事で全焼しましたマウイ島のラハイナ浄土院の復興支援金をお願いしましたところ、檀信徒をはじめ沢山のの方々よりご協力をいただき誠に有難うございました。この寺報にてあらためて厚くお礼申し上げます。お蔭様で昨年十月末日現在をもちまして、一六〇名の方々よりご支援をいただき、合計百五十八万七千円の浄財が集まりました。

檀信徒並びに有縁の方々より頂戴いたしましたこの貴重な浄財につきましては、昨年十一月九日に住職夫人が住職に代わりマウイに行き、無事に原源照ご住職の奥様にお渡しすることができました。なお当山からの支援金につきましては、別途ハワイ開教区を経由して百万円をお渡しさせていただきました。

原上人はこれまでのお疲れが出たのか、胆石で緊急入院されており、残念ながらお会いすることができなかつたものです。帰国後には無事に退院されたようで、早速にこの度の支援金につきましてもお礼のメールを頂いております。現在原住職夫妻はラハイナより車で一時間程のワイリクという場所に長女のマーヤ夫妻

とともに住んでおられます。ラハイナ市街地はまだ現地の人でも限られた人しか立ち入りができない状況であり、全焼しましたお寺の跡地にも行くことはできなかったようです。



「左より長女のマーヤさん・原上人奥様の節子さん・当山住職夫人とその友人で吉岡さん」

今回の訪問に当たりましては全焼により仏具や袈裟なども一切焼失しておりますので、お願いされた仏具や経木塔婆などをお持ちいたしました。

街の復興も寺の再建もまだまだ道のりは遠いと思いますが、またラハイナにお念仏の声が響きわたることを願うばかりです。

(貞林院瑞正寺)